

# 養護施設児の学業不振に関する研究

或養護施設入所児の3年間に亙る算数学力の変化についての事例研究(3)

研究第6部 権平 俊子

## I 目的

徳島県全養護施設児と、小、中学校在学児、各学年1学級に対して、算数学力診断テストを行い、その結果につき、検討を加えて第23集に報告した。その中の1養護施設入所児につき、詳細の資料が得られたので、事例研究を行って、第23、24集に報告した。更に3年間に亙り行った算数学力診断テストの結果及び、施設内で行った算数学習の取り組み等を加えて、算数科の学業不振に焦点をあて、事例研究を行い、その原因を探り、改善に役立てたい。

## II 方法

1養護施設児(1986年小学生一男12名、女6名、中学生一男2名、女1名、合計21名)に1986年、'87年、'88年の各1回、同時期に算数学力診断テストを行い、入所年齢で、乳児院からの者(A群)3歳以下(B群)3歳1ヵ月~6歳(C群)6歳1ヵ月以上(D群)の4群に分けて、そのテスト結果を対象児の学年の1986年の県全養護施設児の平均と比較し、平均値との差を出し、3年間の変化を見ると共に、算数科の学校の成績評価、知能指数施設職員による施設内での行動、様子の評価、及び、1986年'87年'88年施設内で行っている算数学習の施設全体の実施状態、各子供の学習の取り組みを施設の算数学習と学校の学習につき、施設職員に5段階評価で評定してもらった結果を加えて検討し、事例研究を行う。

## III 結果及び考察

### 1. 算数学力診断テストの結果

#### (1) 3回行ったテスト結果の比較

算数学力診断テストを1986年から年1回3年間行った者21名の結果について、人数が少ないので統計的処理は避けて、傾向をみると、次のようである。

- a) 1・2・3 と上っていった者— 4名 19.0%
- b) 1・2 は変動なく、3 が上った者— 2名 9.5%
- c) 1 より 2 が上って、2・3 は変動なしの者— 3名 14.3%
- d) 1 より 2 が上り、3 が下ったが、1 より 3 が高い者—

2名9.5%

- e) 1より2 が上って、1 より 3 が下った者— 3名14.3%
- f) 1より 2 が下り、3 が上ったが、1 より 3 が下った者— 3名14.3%
- g) 1より2 が下って、3 が上り、1と 3とでは変動ない者— 1名4.8%
- h) 1・2・3 と下っていった者— 3名14.3%

#### (2) 1回テスト結果と3回テスト結果の比較

- a) 3回の方が上った者— 11名52.3%
- b) 3回の方が下った者— 9名42.9%
- c) 変動しない者— 1名4.8%

以上の結果、上った者と下った者について、 $\chi^2$  検定の結果、有意差は認められない。

#### (3) 入所年齢別にみたテスト結果

入所年齢別、A群(5名) B群(5名) C群(4名) D群(7名)について、1回と3回のテスト結果を比較してみると、次のようである。

- a) 3回目の方が上った者  
A群— 3名60.0%、B群— 2名40.0%、C群— 3名75.0%  
D群— 3名42.9%
- b) 3回目の方が下った者  
A群— 2名40.0% B群— 3名60.0% C群— 0名0%  
D群 4名57.1%
- a) 1回目と 3回目が変わ動しない者  
C群— 1名25.0%

以上の結果から、各群を比較してみると、C群 3歳1ヵ月6歳までに入所した者に上った者が多い。

### 2. 施設内で行っている算数学習の状態

24集で報告したが、この施設では、岸本裕史氏の方法による算数科の学習指導を施設内で行っている。3年間の施設での実施状態を施設職員に質問紙を送り回答してもらった結果は次のようである。

#### 1) 算数学習の有無

'86・'87年指導員による算数科の指導を実施した。

'88年指導員の指導と本人の自習を併用した。

#### 2) 指導の形態

'86・'87年複数の子に複数の指導員での集団指導

'88年個人指導と集団指導の併用

#### 3) 指導者について

"86・"87・"88 年施設の職員が交代で当たった。

4) 指導の回数と時間、平均して1週間に何回位実施したか

"86・"87 年週5回、"88年週4回。

5) 指導時間(開始時刻と終了時刻)日課の中に決めていたか

"86・"87 年— 30分 "88 年—15分と決めていた。

6) 指導のための部屋。

"86"87"88 年部屋は特に用意しなかった。主に食堂を使った

7) "86"87"88 年の各年の自分の施設の指導の力の入れ方につき、5段階評価で評定してもらった。

"86"87年は4、"88 年は3である。

3. 施設で行っている算数学習に対する、各子どもの取組み方

1986"87"88 年の各年の、各子どもの算数学習の取組み方につき、施設で行っている算数学習と、学校の算数学習別に、施設職員に5段階評価で評定してもらった。その結果について、各子どもの3年間の評定値の平均値を施設、学校別に出して、算数学力診断テスト結果の1回と3回とを比較して、上った群、変動しない群、下った群に分けて、その群の平均値を出した結果は、次のようである。

表1 各群別取組み方の評価値の3年間の平均

	人数	施設学習	学校学習
上った	11 (不明1)	3.0 $sd$ 1.20	2.5 $sd$ 1.02
変動なし	1	1.3	1.0
下った	9 (不明2)	2.9 $sd$ 0.72	2.4 $sd$ 0.82

以上の結果から、学習の取組み方については、上った者、下った者に差はみられなかった。

4. 対象児の知能指数

3回テストを行った21名中不明1名を除き20名の知能指数の平均は101.15、SD 12.78である。テストが1回より3回が上った者11名中不明1名を除き、10名の平均は101.0、SD 6.86、変動なしの者1名は58、下った者9名の平均は106.1、SD 8.63 である。変動なしの者はこの施設内で1人だけずばぬけて低い。(次に低いのは93) 課題がむずかし過ぎて、変化しないのではないか。上った者、下った者の違いは殆んどない。

### 5. 事例研究

1) M. O. 男 (1回テスト時小学3年生) 註1

入所年齢 5歳1ヶ月、理由は母親が第5子出産後死亡、父親は上2人の子だけ家に置き、生活が安定するまで、施設で養育して欲しいということである。I.Q.が99あるのに、学力が低下して特殊学級に入級している。算数学力診断テストの結果は、1回〜 -26.5%、2回〜-22.4% 3回〜-5.4% と上っている。本児は入所当時から、性格が暗かった。"86 年に行なった佐野良五郎案の学業不振児のチェックリスト(以下佐野式チェックリスト)を行なった結果は、要注意、異常にはチェックされていない。"86 年に行なった調査で、性格は3.4、施設内の様子は2.8 と評価されている。(5段階評定で数が小さい方が望ましい)夜尿があり、万引きをしたこともあった。施設内で行った算数学習では、初めは意欲がなく、100 問計算が12〜13分かかったが、6ヶ月で2分で出来るようになった。施設内の算数学習の取組みについては、"86年〜5、"87年〜3、"88 年〜3 と評定されている。特殊学級なので、学校の学習は殆んどない。しかし、だんだんに算数の計算以外の他の領域も理解できるようになり、算数学力診断テストの結果も上ってきた。それに伴って性格も明るくなり、夜尿もなくなり、情緒も安定してきた。サッカーが好きになり、"88 年にはマラソンや運動会でよい成績をとるようになった。

2) T. T. 男 (1回テスト時小学6年生) 註1

I.Q.105 両親が離婚し、父親が親権者になったが、養育能力に乏しい為、乳児院に入り、措置変更されて入所した。算数学力診断テストの結果は、1回〜+13.5%、2回〜+3.4%、3回〜+43.2%で3回が非常に上った。"86年に行った、佐野式チェックリストの結果は、要注意、異常にはチェックされていない。低学年の時は、無気力で強い劣等感があり、ひねくれた性格で、盗みをしたこともあったが、それもよくなってきた。"87年に行った調査では、性格は2.7、施設内の様子は2.5と評価され、普通である。施設内で行った算数指導の取組みは、"86年〜5であったが、2回目のテストが下ると、施設内の算数学習を一層、真面目にこつこつ努力してやり、学校の学習もやった結果、3年目の頃には、学校の成績の順位が70番も上った。その後、母親が多額のお金を与えたり、ファミコンや、音楽に夢中になり、落着きない生活になってきたので、施設では注意して、見守っているとのことである。

3) I. N. (1回テスト時中学1年生) 註1

I.Q.107 父親が死亡し、母親に養育の義務があったが仕事の関係上、子どもの養育によくない環境ということ

で、乳児院に入り、措置変更で入所した。算数学力診断テストの結果は 1回～+11.14、2回～+24.23%、3回～+30.76%と上った。"86年に行った佐野式チェックリストの結果は、要注意、異常にはチェックされていない。

"87年に行った調査で、性格は3.0、施設内の様子は2.3と評価されて、特に問題はない。施設内の算数学習の取り組みは3年間とも2と評価され、学校の数学学習は、"86年"87年2、"88年と3と評価されているが、高校の受験勉強を熱心にやった結果、学校の数学の成績評価が中1が2/5から中2と中3が3/5に上り、希望通り高校に合格した。本児は高校に入りたいという目標を持ち、受験勉強したことが学力向上に役立ったと思われる。

#### 4) I. Y. (1回テスト時小学5年) 註1

I.Q.114 入所理由は両親が調停離婚し、親権者は父となり、父方祖母に引き取られたが、祖母が病弱になり養育困難なため乳児院に入り、措置変更で入所した。この事例は24集で施設職員に協力的でなく扱い難いということ、施設内での学習をしなくなった、学校の勉強もしないということを取り上げたが、算数学力診断テストの結果は1回～+40.07%、2回～+36.75%、3回～+30.35%と下り気味で、"86年3/5、"87年4/5、"88年2/5と学校の算数科の成績評価も下ってきている。学習意欲がないことが心配され、"86年に行った佐野式のチェックリストで、学習習慣不確実型が要注意にチェックされている。学校では、友達との関係はよく、交友関係も広い。"87年に職員が評価した結果では、性格は3.1で、施設内での様子は3.2である。性格では、「暗い・強情である・だらしがない・やる気がない・気分が変りやすい・感情表現が乏しい・甘えない」が4段階にチェックされているが、非常に我慢強い点もある。様子では、「リーダーシップがとれない・勝手に振舞う」が4段階にチェックされている。非行・反社会的行動、非社会的行動は過去、現在ともない。これからみると、自分の気持を素直に表現出来ず、相手に理解してもらえないことが多い、子供のように思われる。施設内でしている算数学習の取り組みは、"86年3、"87年3、"88年1で、学校の勉強の復習と予習をするは、"86年1、"87年1、"88年1である。施設職員の記録によると、行動面では、思春期に入り、中学生らしく、みせようとする気持からか、いろいろな動きがみられ、気持の動揺が感じられた、ということである。これと学校の算数科の成績が下ったこと、算数学習をしなくなったことと関係があるとも思われるが、すでに、"86年に学習習慣不確実型が要注意になっていた点で、学習態度について、施設でも、成績がよいうちから、気にしていた子供である。非行・反社会的、

非社会的行動は示していないが、情緒不安定な状態と学習をしないこと、関係があるのではないかと考えられる。施設職員が本児を扱う方針として、「話しかける・励ます・誉める」をあげていることから、精神的な支えが必要な子供だという、判断があることが伺える。

#### 5) N. K. (1回テスト時小学2年生) 註1

I.Q.115 両親が不和になり、父親が本児を虐待する。父母とも離婚する気にはなったが、父親が本児を引き取っても、定職のない今の状態では、養育が出来ないということで、2歳6か月で入所した。算数学力診断テストの結果は1回～-7.88%、2回～+2.54%、3回～-12.43%である。学校の算数科の成績評価は"86年1/3、"87年2/5、"88年1/5である。職員が評価した結果では、性格2.7様子2.8で、過去に盗みをしたことがある。学校で友達をいじめたり、集団行動がうまくとれず、友達とのトラブルがよくあり困ったことがあった。施設内でしている算数学習の取り組みは、"86年5、"87年3、"88年3で気が向くとよく頑張るが、むらがあり、伸び悩む。指導者がついていると、よく頑張る傾向がみられた。学校の勉強の予習、復習は"86年1、"87年2、"88年2である。I.Q.が高いのに、テスト結果、学校の成績はよくない。"86年に施設内の学習によく取り組んだ結果、テスト及び、学校の成績も上っている。本児の施設で、扱う方針として、「甘えさせる・励ます・誉める」をとっていることは、指導者がついていれば、よく学習するということに対する適切な扱いと思われるが、この施設の指導の力の入れ方が"86-87年4で"88年3と下っていることと関係があるのではないかと考えられる。学習を自分の意志ですするという習慣がつくまでは、指導体制の影響も受やすいと思われる。

註1 文献2、295-301頁。文献3、241-249頁参照。

#### IV おわりに

1986年から年1回、3年間に亘り、1養護施設の入所児に算数学力診断テストを行い、その結果を比較検討するとともに、昨年迄の諸調査に、今年度は3年間、施設で行っている算数学習の実施状況、各入所児の施設の算数学習、及び学校の算数学習の予習、復習の取り組み方につき、施設職員に5段階評価をしてもらった結果を加えて、各対象児につき、その特徴を把握した。5事例について、事例研究を行った結果、1986年から、岸本氏の方法でしている施設内での算数学習に、熱心に取り組んでいる子は、効果が上っている傾向がみられたが、子供自身

が高校進学などの目標を持った時に、著しい伸びを示した。この傾向は他の施設でも同じようにみられた。この施設では、算数学習につき「目先の変化にとらわれないで、根気よく、指導していく必要がある。」という考えで実行されていることに共感し、その努力に敬意を表したい。

(本研究はプロジェクト、学業不振の実態と改善に関する研究の一環として行ったものである。プロジェクト研究の研究員の方々と徳島県児童相談所 森依順氏、長年に亙り、資料の蒐集に御協力頂いた施設の職員の方々に深く感謝する。)

#### 参考文献

1. 権平俊子他「情緒障害児等の学業不振に関する研究」日本総合愛育研究所紀要第14集 123 - 127頁 1978年

2. 権平俊子他「学業不振の実態とその改善に関する研究 第1報」日本総合愛育研究所 紀要 第23集 125 - 133頁 1987年
3. 権平俊子「養護施設児の学業不振に関する研究」日本総合愛育研究所 紀要 第23集 295- 301頁 1987年
4. 権平俊子「養護施設児の学業不振に関する研究」日本総合愛育研究所 紀要 第24集 241-250 頁 1988年
5. 北尾倫彦「学業不振」1975年 8月 日本文化科学社
6. 岸本裕史「計算の力をきたえる講座岸本裕史の教育方法3」1987年 5月 部落問題研究所出版部
7. 佐野良五郎「学業不振児」1978年 3月 佼成出版社
8. 徳島県児童相談所「養護施設児の学業不振児の原因と対策に関する研究」1987年 3月
9. 徳島県児童相談所「徳島県養護施設における学習指導に関する実践研究の中間報告」1988年 3月

Research on Underachievement of Children in a Children's Home (3)  
- A Three Years Study on their Achievement on Mathematics -

GONDAIRA Toshiko

I conducted the mathematics ability test at a home of neglected and abused children at Tokushima prefecture on 21 children (21 children, male:14, female:7). Then compared the result. In addition to this, I asked the faculties of this home to assess the condition of mathematics teaching in the home, and the attitude of each child to the mathematics learning by 5 grades. Also I obtained the characteristics report of each child.

I picked up 5 children from the home and conducted the detailed research on them. The result shows that any child who positively engage in the mathematics learning at home (this learning is conducted from 1986) shows positive result in his/her achievement. The achievement shows greatest positive result when children has the aim like going to high school.